

# ラテンの鼓動をスペイン語で感じる

加藤 薫

## 1. スペイン語から世界を視ると

やや古い話しになるが、2001(平成13)年9月11日の体験からはじめる。9.11は米国で同時多発テロ事件が発生し、この日を境に世界の流れが変わったことで記憶されている。

筆者はこの日南米ボリビアのサンタ・クルス市にいた。ホテルでTVニュースをチェックしようと英語CNNチャンネルに合わせた。映っていたのはニューヨークのツインタワーに旅客機が突っ込み、建物全体が崩壊してゆく映像で、次々とブッシュ政権の高官たちが登場しては「被害者」、「戦争行為」、「国際テロ」、「敵性犯罪」といったキーワードを使ったコメントをヒステリックに繰り返して連発していた。

次にスペイン語のCNNチャンネルに切り替えた。やはり同じ映像が使われていたが、キューバのカストロ、ベネズエラのチャベス、チリのバチェレなどスペイン語を母国語とするラテンアメリカ諸国の政権担当者の生のコメントが聞けたほか、アフガニスタン、イスラエル、ロシア、イラク、エジプト、中国などから事件を憂う立場や当然の報いとする意見など様々な異論が集められ、スペイン語字幕で流れた。

同じCNN系なのに英語とスペイン語報道の差異はまた想定される受信者の差異を反映している。世界の約40カ国以上で受信可能なスペイン語CNNは英米のものも含めて世界中の反応を公平に放映し、英語のCNNは事件を国際テロ行為だと断ずる米国政府の情報操作の意図を反映していた。英語しかわからないと世界理解も偏向するという事例である。

英語圏と区分される米国の内情も大きく変わっている。長らく最大のマイノリティー集団とされてきたアフロ系米国人人口を抜いてラティーノ系(出自がラテンアメリカ・カリブ圏の米国市民)が最大集団となっている。ラティーノはプロテスタント教派や英語を使うアングロサクソン文化に同化せず、カトリック信仰とスペイン語文化をアイデンティティーの基本として大事にしている。すでに1990年代になると、スペイン語圏であるメキシコと接する米国国境地域では、「この店には英語を話す従業員がいます」というような張り紙をわざわざ掲示する必要性が生じたほどだ。日本人におなじみのサンフランシスコやロサンゼルスという地名がスペイン語起源であることで象徴さ

れるように、米国のミシシッピ川から西の大半の地域は19世紀半ばまではスペイン語圏（スペイン領からメキシコ領）だったことを思い出せば当然という気もする。

市場動向に敏感な音楽界では、グローバル戦略としてマドンナ級でも英語版のほかにスペイン語版をリリースし、アルバム売り上げ増加を図るのが当たり前になっており、言語感覚に問題のないスペイン語と英語のバイリンガル歌手のデビュー機会は増えている。作曲・編曲面でもジャズやヒップ・ホップ、ロックなど既存のジャンルでもリズムや楽器編成などにラテン色を加えないと市場での注目度も評価も低くなる。CD専門店に入るとスパングリッシュ(Spanglish=スペイン語とイングリッシュのハイブリッド言語)と掲示されたCD/DVDセクションを特設している店が増えており、ラップ/ヒップホップ系で占められているがこれも21世紀的現象ではある。

英米文学でも社会底辺のサブカルチャーを扱おうとすると、必然的にスペイン語を母語とする中南米・カリブ圏からの移民層を描かねばならず、売り上げ部数の多い犯罪小説でもコカインなど麻薬ものを扱うとなると、とたんにスペイン語の隠語や会話が增え、ほとんど異文化世界の描写となり、丁寧な解説がないと理解不能になる。

最近のハリウッド製映画を見ている、SF未来モノに出てくるロボットやミュータントはしばしばスペイン語を決め科白に使う。未来社会ではスペイン語が普遍語にでもなっているようだ。日本でも古臭く思われていたタンゴが大ブームとなっている。タンゴとは南米アルゼンチンで20世紀初頭に生まれ、世界を魅了した歌とダンスと演奏の総合芸術世界である。スペイン語でタンゴの魂を歌う日本人歌手、タンゴの改革者と呼ばれたピアソラに匹敵するレベルにある小松亮太などのバンドネオン奏者、そして20年前ならほとんど不可能といわれたダンス部門でのタンゴ世界大会における上位入賞者の輩出などスペイン語圏の文化に魅了された日本の若者の新しい動向は注目されている。

音楽としてはタンゴより新しく1970年代になって世界に注目されるようになった、キューバとプエルト・リコというスペイン語文化圏を発祥とするサルサでは、スペイン語で歌う日本人女性歌手ノラを擁したオーケストラ・デ・ラ・ルスがその世界的活動に対して国連から平和賞を授与されるなどやはり日本のレベルの高さが注目された。

スペイン語の問題とは直接関係ないが、中高年層を核に世界遺産を訪れる日本人が増えている。人気上位にランキングされているのはマチュ・ピチュやチチェン・イツァ、ナスカの地上絵といった古代遺跡だが、どれも中南米のスペイン語圏にあり、日常会話程度ながらスペイン語を使いこなす中高年が増えている。また中南米への日本人移民の子孫が日本で働く事例も増えてきたが、その流れで子供の頃から慣れ親しんだ中南米料理を日本国内で提供するレストラン数も増加している。こういう中南米料理店ではメニューに書かれたスペイン語や店主・従業員のスペイン語会話が理解できれば、何倍も楽しむこともできるのだ。

そう、世界は今同時多発的にラテン化しており、そのラテンの鼓動を感じ、受発信するツールがスペイン語なのだ。

## 2. スペイン語修業

外国語の習得から修得への道は多分に相性というものがある。高校時代に古文と漢文という漢字世界の踏破につまずいた筆者は、大学では必然的に欧米語の修得をめざすしかなかった。英語は必修なので選択の余地はなく、もう一つの外国語が問題だった。ドイツ語初級の講師はポニーテールが素敵な女性でただ彼女の声を聞くだけで幸せな気分だった。フランス語初級クラスはあこがれの同級生が受講しており、会話など一緒に過ごす時間があつたのが嬉しかった。でも出会いは素晴らしかったが動機が不純だったので上達はせず、どちらも初級レベルで降参した。

時代は大学紛争の真っ只中で、騒々しい世俗世界から遠く離れて西洋古典の歴史世界に浸りたく、イタリア語、ラテン語に古典ギリシャ語のクラスも受講した。小人数で毎回必ずあたるので必死に予復習に時間を費やしたが、購読で神話や哲学世界に入ったとたんに共有できない文化というものがあるのだなどの実感を持ち、どれも初級でやめた。専門性と言語の関係が密接で、教師の個性があまりに強く出すぎていたことに違和感があつた。

漢字でも欧米語でもないということではこれなら体質にあうかと現代ヘブライ語にも挑戦した。日本では初級レベルだったが、それでもイスラエル留学の資格を得、聖書世界の勉強だと称して約1年を周辺のアラブ諸国と戦闘中だったイスラエルで過ごした。考古学には興味があつたが、どうにも自分の未来の姿が描けなかつた。インディアナ・ジョーンズになりたかつたが、考古学はもはやそういった略奪的冒険物語を許さない時代に入っていた。

留学期間と学年進級の問題で、結局学部には6年在籍したが、証明できる語学の成果といえば英語のTOEFLで600点（コンピュータ採点以前のスコアシステム）とつたこと以外、外国語能力はすべて初級どまりだった。

美術分野での大学院進学を考え始めた時、初めて英語以外の言語の重要性に気がついた。西洋美術専攻の場合、研究者が四、五の欧米語に通じているのは当たり前で、履歴書の体裁では十分に資格があるようだったが、文献精読に耐えるほどの実力がないことは本人が一番知っていた。とりあえずTOEFLのスコアとGPAだけで進学できる外国の大学院ということで30通以上の応募書類を書き、そのうち3校から奨学金付きでの受け入れ通知がきた。そのうちの1通がメキシコからのもので、奨学金の必須条件として入学後1学期以内に12単位のスペイン語修得、2学期以内に計18単位修得（全B評価以上）が条件だったが、ここに決めた。

スペイン語初級の初日に配られた教科書の文法説明は全て英語で、以来、筆者の中級までのスペイン語教育は全て英語を通じてのものだった。でもこれが以外とわかりやすかつた（と勝手に今でも思っている）。ちなみに上級クラスは教材も含め全てスペイン語のみだった。ともかくも全てのスペイン語科目で奨学金の条件もクリアし、無事大学院も修了できた。

スペイン語能力を超短期間に、しかも大学院講義に耐えられるレベルまで高めるための工夫とし

て、まず最初の一ヶ月間は、日常生活に必要な衣食住関連の単語を暗記することで、積極的に食品市場や各種専門店を訪れ、辞書やメモなしに購入したり、とにかく生活消費財に関する会話がスムーズにできるように心がけた。TVやラジオもつけっぱなしにしてとにかくスペイン語環境が途切れないようにした。文法構造の理解が進むにつれ、段々と歴史解釈や抽象的な会話能力向上への要求が高まったが、そこで地元の中高生と親しくなり、彼らの使っている教科書副読本を借りて音読したり、知識の確認やロジックの組み立てを学ぶディベートをしかけたりした。見返りには毎週柔道や空手の無料青空教室を開催したりした。

大学院奨学金の条件として週4コマ程度学部学生科目の助手をこなす仕事があった。美術関連の材料や用具にはすでに馴染みがあったからそれらのスペイン語名称は憶えればよかったのだが、例えば素描クラスの初学学生に鉛筆やパステルのもち方や効果的な陰影技法をスペイン語で教えるのまでは無理だった。でも言葉の壁ゆえに「出来ない」とはいえない状況だったので、類似科目の講義を聴講し、担当教員の使う言葉や身振りを模倣するというOJTを自ら実践した。

今になって思えば、模倣力と記憶力だけで勝負してきた感もあるが、とにかく週5日間、朝8時から夜8時までのスペイン語+大学院美術講義+助手仕事、さらに夜11時まで図書館で予復習とレポート作成、TV/ラジオの聴き取りに週末は地元中高生との交流と、とにかくスペイン語しか使わない半年間を過ごした。日本人学生は自分一人しかいなかったから、大学にいる限りは日本語を使うこともなかった。スペイン語科目を全て修了した後に大学院必修の教職実習で「日本美術入門」という講義を担当させられた時には日本語や漢字を思い出せなくなっていたほどである。

日本語を一切使わない生活というのはすでにイスラエル留学で一度体験済みだったからそれほど難しいことではなかった。だが外国語修得という面ではイスラエル留学中とはくらべものにならないほど進歩していた。「なりきること」に迷いがなかったのである。それは、短期間にスペイン語運用者としてメキシコ人と同等のメキシコ在大学生になりきり、互角以上の知識や価値観を身につけ論議する、ということであった。イスラエルにいた頃はユダヤ人にもなりきれなかったし、アラブ世界との対抗意識も育むことなく、また旧約・新約の聖書の信仰世界にも入り込むことはなかった。どこまでも傍観者、お客様であり、必然的にヘブライ語修得の動機も目的もあいまいだったのである。

スペイン語だけについて言えば、その後再度訪れたメキシコでスペイン語非母語者へのスペイン語教授法を修了し、一応スペイン語教師としての資格をとっているが、専門とは考えていない。その後、数十年をスペイン語か英語を母語とする国々の美術研究で過ごすこととなったわけだが、専門性を深めるにつれ、メキシコ先住民言語の一つナウア語の絵文字もある程度解読できるようになった。でも古代マヤ語の解読はいくら挑戦しても憶えきれずあきらめた。やはり相性があるのだろう。

大学院進学後と、それほど若いときからスペイン語に目覚めていたわけではない。ただどの言語であるにせよ、外国語修得に必要な基本的技能(発音、主語の明確化、時制の区分など)については十分すぎるほどの訓練を知らずして積んではいた。単にスペイン語とその文化圏が気性にあっつい

ただけなのかも知れないが、その意味ではもっと早くスペイン語と出会ってればよかったのかも知れない。

筆者のように言語をコミュニケーションのツールと割り切って考えれば勉強方法も徹底できる。しかしツールとして使いこなすだけの別の知識・知性の集積は必要だった。また言語には「ことだま」という言葉があるが、言語、あるいは文字そのもののアウラを感じる必要のある分野を専攻する人には、筆者のような短期集中型の修得方法は向かないというか、逆に害のあるものだったかも知れない。また30歳代になって同じ語学教育を受けろといわれれば絶対躊躇する。初学年齢も大事だ。

### 3. 外国語修得と能力維持の実践的な方法＝専用チャンネルの開設

日本で外国語科目を習得しても、修得には至らず、挫折する例は多い。筆者もそんな挫折体験をかなり積んできている。どうしてなのだろう。結局、どんなに語学の授業に集中し、予習・復習に入れあげても非日常なのである。ネイティブ講師との会話や身振りで充実した講義を90分受けても、教室を出たとたん日本語会話と日本人特有の身体性の世界、日本の空間環境に戻ってしまい、教室での成果を長時間保持し続けるのが難しいからだ。ではこんな現実の中でどうしたらいいのであろう。

日本にいて、外国語の運用能力を落とさない筆者の長年の工夫としては、言語の融合とか文化の翻訳ということを考えないようにしていることが挙げられる。何のことかちょっと説明が思うが、要するに外国語別の言語チャンネルをきちんと切り替えて、常に混線しないようにすることだ。曰く日本語専用チャンネル、英語専用チャンネル、スペイン語専用チャンネルと独立したものに分け、日本語モードでスペイン語を使うようなマネはしないことだ。でないとなかなかのわからない和製外国語やカタカナ日本語の氾濫に加担するのみで、外国語そのものの上達にはつながらない。まず和訳して考えるという勉強方法は、どのスペイン語圏の人ともインターネットで瞬時にコミュニケーションがとれ、目的や専門が何であれ物理的に人的交流や接触が可能で身近になった現代においてはかなり非現実的な設定だ。

スペイン語の修得の実践的な方法としては「スペイン語運用者になりきること」である。上記の言語チャンネルのアナロジーに置き換えれば、それはスペイン語チャンネルを開設し、可能な限り24時間アクセス可能な状態にしておくことだろう。日本語での会話や読書している時でも、頭の中でピッとチャンネルを押す都と瞬時にスペイン語の世界に切替わり、音楽でも料理でもスポーツでも、はたまた恋愛でも経済の話題でも、それこそ全ての事象をスペイン語で考え、表現するモードを長時間維持することである。日本人であること、日本語での表現などはとりあえず忘れてしまおう。

しかし、日本にいる限り24時間スペイン語チャンネル設定にしておくのは難しいと感じ、できれ

ば周囲もスペイン語チャンネルしかない環境に身を置いて、多様な番組内容のプロデュースを考えた方が早いし、現実的だと考える人も出てくるだろう。そう、留学である。しかしこれまで色々な国で様々な日本人留学生の様態を見てきたが、それこそ寝ている時の夢の中でもスペイン語で会話するといった24時間スペイン語体制を築いている人は極端に少ない。スペイン語しかできないという恋人や伴侶を伴う生活をするのが一番だが、誰にでも可能というわけではない。

海外にいと何かと日本人は群れる。外国語修得という目的を忘れ、とりあえず不要な日本語チャンネルのメンテナンスに忙しい人が多すぎる。またどんな外国生活でも、衣食住といった人類共通の生活に必要な言語能力な大体3ヶ月もあれば習得できるのだが、後はこのレベルでの繰り返しでスペイン語を修得したような自己幻想を抱いている人も多い。永遠の初級者レベル満足者で、その限りにおいては満点でも中級、上級レベルでは合格点にさえ到達できない例である。スペイン語を学んだ結果をどこで、いつ、どのように活かしたいのか、明確な目標をもつことが大事である。

ちなみに筆者の場合、ある時点で脳内スペイン語チャンネルが開局できて以来、番組内容もすこしずつバラエティーに富む編成が可能になり、今では美術全般、音楽、演劇、ダンス、映画、文学、マスメディア、料理、酒、芸能、伝統文化、人類学、民俗学、歴史など文化情報主体の24時間体制も夢ではないが、どうしても受け入れられない分野がいくつかある。法律関連とか数理科学関連分野は弱いし、抽象的な政治・経済問題にもあまり興味はない。筆者の元にスペイン語で債務解消のための法律相談などでこられてもまず役にはたてない。言語を変えた日本語チャンネルでも英語チャンネルでもこの特性は変わらない。また帰国子女のように幼少時からバイリンガル環境で育ったというわけでもないし、スペイン語ネイティブ女性と結婚して日常の家庭生活をスペイン語でというわけでもないから、スペイン語の理解も教科書通りでしかない。もうそういうキャラクターなのだと割り切るしかないのだが、不得意な分野があるからといってスペイン語運用能力がない、というわけではない。

#### 4. ラテンアメリカとのつきあい

現在ラテンアメリカ・カリブ圏と定義される地域には33の独立国と13の非独立領が含まれている。このうち18の独立国がスペイン語を公用語としている。ラテンアメリカ・カリブ圏の地域研究にはスペイン語の知識や運用能力がまず不可欠に見える。スペイン語に英語運用能力が加われば研究可能な対象は30カ国にまで増える。ポルトガル語を公用語とするブラジル、オランダ語を公用語とするスリナム、フランス語を公用語とするハイチなどがあるが、どれも隣接するスペイン語公用語国と政治経済的に密接にあり、旧宗主国との関係は希薄である。

さてこのスペイン語公用語国のひとつであるメキシコでスペイン語を学んだわけであるが、今から思うと挫折しなかった理由にメキシコの文化・風俗が体質に合っていたこともあるのではないかと思っている。曰く、約束の時間を守らない、昼休みを3時間もとる、瞬間的熱中度は高いがすぐ

飽きる、言葉に裏表がある、など等といった特性が実は時間にルーズ、昼寝大好き、テンション高いが浮気性、ひらめきで一気の問題解決という性格の持ち主には違和感がないのだ。これも相性の問題だろうか。日本の閉塞的な社会に息がつまりそうな人には、是非異文化体験の対象としてラテンアメリカをえらんでほしいと思う。スペイン語は自分にとって快適な居場所を見つける助けになるツールなのだ。

もう一つ重要に思えるのは言語の音楽性ということだろうか。筆者は幼少時からピアノを通じて西洋クラシック音楽に親しんできた。西洋音楽の基本である絶対音感には妙に秀でていたし、オーケストラの練習などでも異なる楽器の異なる音色や音程の差が聴き分けられた。一方では西洋音楽共通のリズム感の単調さ、画一性に飽き、中学高学年時には反抗期とも重なり、当時は不良の音楽、非行の温床などといわれたロックンロールやジャズの世界に傾倒していった経歴を持つ。段々とピアノやギターといったメロディー楽器よりもリズムを刻むパーカッション楽器に興味も移っていった。

今にして思うと外国語の学習にも音楽の素養が影響しているような気がする。音読の際のリズム感、単語のアクセント位置やその移動、会話者の癖、微妙な発音の違いなどを音楽的に把握していたように思う。文章暗記なども楽譜を憶えるように文字の大小や子音の形などを図形的に見ていたように思える。速読は今でも得意である。

スペイン語を習い始めたメキシコはまた音楽あふれる国で、手風琴からトランペットまで路上ライブは当たり前、乗り合いバスにもギターやハーモニカを携えた障害者が乗り込み、曲を披露しては日銭をかせいでゆく。個人タクシーでは客のいるなしにかかわらず大音量で好みのCD音楽を聴きながら走る。また楽器は使わないにせよ政治家の演説や路上の呼び込みなどでは、独特のリズム感で抑揚で聴衆を陶醉に導く技法を確認した。スペイン語の会話もリズムを設定して強弱や抑揚をつけて発声すると実にネイティブのスペイン語らしくなるから不思議だった。また聞き取りにおいても音色の異なる楽器を聞き分ける要領で知覚し、またそれを真似る形で再発信することをくりかえしたので大きな障害になることもなかった。女の子を口説く時にはスローのボレロ風といったように自分で演出していった事もあるが、その成果は……秘密。

キューバのスペイン語にはまたメキシコとは異なるリズム感があり、ペルーやパラグアイのスペイン語にはまた違うリズム感がある。よく大学でスペイン語を学んだだけなので現地の人たちの用語や単語の使い方や速度が速すぎて全くわからないとショックを受けて落ち込む日本人を見かけるが、国際語であるスペイン語が国毎に全く異なる文法を採用してるわけでも、全く異なる単語を使っているわけではない。その国固有のリズム感や音程域を掴むと眼からうろこが落ちるように理解可能となるから不思議だ。ただ日本の音楽教育ではリズム感養成訓練はあまり重視されていないし、いくらカラオケがうまいからといってもね……。でも一見無関係なように思える音楽の素養が外国語修得に役にたつはず、ということだと理解してもらえばいい。言語の身体性ということを考えれば、聴覚の他にも運動や舞踏、造形美術、料理など手足や眼、鼻などの五感のどれかひとつでも訓

練しておく外国語修得で早く成果を挙げられるようだ。

研究分野によって事情はかなり異なるが、筆者のようにラテンアメリカ、あるいはラテンアメリカ的な文化現象に興味をもつ人間にとって、スペイン語は必要不可欠な入口のひとつだ。しかし最近の若い研究者にはこの入口からさらに奥にある別の言語の扉をあけて中に入ってゆく人も増えている。それはスペイン語普及以前から存在し、現在まで変容をかさねながらも存続してきた先住民言語の世界で、南米ではインカ帝国の公用語だったケチュア語や、メキシコから中米に広がるマヤ語などが例として挙げられる。中にはアフリカから奴隷として連行されてきたアフロ系住民の文化伝統のルーツをさぐるためにアフリカのヨルバ語やバンツー語の習得に時間を割く日本人もできている。どの新しい扉を開けるにせよ、まずは手前にあるスペイン語の扉をあけなければならない。つまり国際語となったスペイン語の修得は、何か普遍的なものに近づく手段ではなく、逆に多様な人間世界の最も個性的な原理にたどり着く手段なのだ結論づけて本稿の終わりとする。